

マニ教 250 年

須 永 梅 尾

Manichaeology since 1737

by

Umeo Sunaga

は じ め に

マーニー教（以下マニ教と表記）とは、3世紀のペルシア人マーニー（以下マニと表記）の説いた教えのことで、バビロニアに発し、アフロ・ユーラシア大陸の東西各地に比較的速やかに伝播したが、消え去ったのも早く、他宗教での異端運動の陰の担い手として存続した場合でも、東方（中国）では14世紀までに、西方ヨーロッパでは13世紀（南仏のカタリ派。アルメニアのトンドラケチ派は19世紀）までに滅び去った宗教で、いわば化石となった宗教とよびうるであろう。

従って今までは人々の心のなかに、この宗教が信仰として生きていないのであるから、信仰の対象としてではなく、あくまでも一部の学問的、知的対象として関心をもたれたに過ぎず、一般の人々にとってはほとんど無縁のものになってしまっていた。

そのような化石となった宗教としてのマニ教の研究は、西洋と東洋とでは、おのずから違った形をとって出発した。科学的な研究の対象として取り上げられたのは、まず西洋の近代にはじまったといわなくてはならない。東洋、殊に中国や日本でのそれは、西洋における研究の刺激を受けて、漸く20世紀からはじまったのである。

マニの死後、かなり早い時期から、マニの生涯とその教え（特に二元論思想の代表的宗教として）に対する関心をもたれ、彼の弟子や教徒たちは信仰と讃仰とをもってそれを表現し、またその敵対者たちはある時は直接に、ある場合には婉曲に、憎悪と怒りをもってそれを書き留めた。⁽¹⁾ これらはそれぞれの立場にたって、主観的な、ある偏りをもって記述された場合が多く、客観的、科学的な方法でマニ教が記述されるようになるまでには、長い歳月を必要としたのである。

18、19世紀に至って初めて西洋において歴史学者、言語学者、神学者たちが、マニの宗教的動機を解明し、教説の概要を明らかにしようとして、入念な研究を進めた。これらの研究が、まだ多くのマニ教史料が発見されていなかった時代の所為もあって、多く誤解を伴った解釈を余儀なくされたのも、やむを得ないことであった。

I マニ教研究のはじまり

まず最初にあげるべきものとして、ヨーロッパ中世の「マニ教的 (Manichaei)」とよばれた異端運動から出発し、遡源してマニ教に辿り着き、その教えの特質が極めて複雑な交錯性にあることを想定した I・ド・ボーゾブルの「マニ教徒とマニ教の批判的歴史」(2巻, 1737—39, アムス

テルダム⁽³⁾を数えなければならない。この著書の中では、重要な史料としてキリスト教の1聖職者の筆になる「アクタ・アルケライ（アルケラウスの行伝）」⁽⁴⁾を使用していることを特記しておきたい。この書はボーゾブル以来西洋でのマニ教研究では早くから問題にされてきた書物で、4世紀前半、ヘゲモニウスという1聖職者の手で書かれた。これはギリシア語の原本からラテン語に翻訳された。ギリシア語本の原本はシリア語であったとも推定される。これは特に西方でのマニ教観の基礎資料として、長い間キリスト教とマニ教との論争において、陰に陽に重きをなしてきた。本書の主題たるメソポタミアの都市カルカル1司教アルケラウスとマニとの間に行われた討論は、虚構に過ぎないことが後に判ったが、そこで引用されている数々の記述には、他で知ることのできない内容もあり注目さるべきものである。この書の特徴の1つは、マニの思想系譜が、スキティアヌス——テレビントゥス——コルビキウス（のちマニと改名）へと継承されたとする見解の源泉が本書に発しているという点をあげなくてはならない。これは主に西方のキリスト教側のマニ教観として長い間継承されてゆくことになる。

ボーゾブルが最初に眼を向けた「マニ教的」というよび名の中世キリスト教的異端のうち、特にカトリ派について、その仕事を受け継ぎ、本格的にこの語の意味と実態を⁽⁵⁾探ったのが、のちのS・ランシマン「中世のマニ教」（1949年、パリ）であった。

つぎに名著と評される「グノーシス」（1835年）を書いたF・C・バウルが「新しい調査と発展した史料に基づくマニ教体系」（1928年、覆刻⁽⁶⁾）なる書で、新しい研究の試みを行なった。ここで彼は「アクタ・アルケライ」の他に、アウグスティヌスの著作と15世紀に生きたペルシア人、ミルホンドの「世界の歴史」を史料として参照したが、ボーゾブル以上にマニ教の根源に迫ることができなかった。それは「教義史の教本」（1886—1910年）⁽⁷⁾を書いて、マニ教の位置づけを試みたアドルフ・フォン・ハルナックにもいえることであった。

1862年、1つの注目に値する書物がライプチヒから刊行された。グスタフ・フリューゲルの翻訳・編集による「マニ、その教義と著作——マニ教史への寄与、イブン・アビー・ヤクービ・アル・ナディムと知られたアブー・アル・ファラジ・ムハンマッド・イブン・イシャーク・アル・ワラークの『キターブ・アル・フィリスト（諸知識の図書目録）』」⁽⁸⁾と題するものである。この長い人名は普通略してアン・ナディムと称するが、そのアン・ナディムが988年に自著の「フィリスト」（以下フィリストと表記）を書いて、ある意味でアラブ文学史上の回顧と展望を与えたのであった。この書のうち、第9章で彼はマニ教について貴重な記録を残したのである。特にマニ教の起源、マニの生涯、伝記を知るには頗る基本的な資料である。マニの宗教的背景、ムクタシラ一派なる宗派の存在、マニの啓示の重要性、マニの公的出現（開教）の年代、月日の正確な記述、マニ教教義の大変要領を得た説明、マニの死、ならびにマニの死後における教団の辿った分裂の経過、マニ直筆の書物のタイトル、バルダイサン派、マルキオン派のことが記されていて、今日でも十分価値のある正確な記録というべきものである。この記述文の底にはマニを1人の宗教的コスモポリタン、1人の偉れた異端者として凝視する著者の冷徹な眼があるのが感じられる。訳者のフリューゲルは、その序文で「アクタ・アルケライ」におけるマニと1司教アルケラウスとの討論は虚構の物語である所以を明らかにした。この訳業はマニとその宗教に関する資料、文書研究にとって新紀元を画するものとなった。因みにこの書の英訳本が、B・ドッジによって1970年に出版されていることを付け加えておこう。

この「フィリスト」と同じイスラム教徒の筆になる貴重な文献が2つある。1つは同書より12年後に、アル・ビールーニーが書いた「古代諸国民の年代学」（1000年）、あとの1つはそれから30年程経ってから発表した同一著者の大作「インド。1030年頃のインドの宗教、文学、年代記、

天文学、習俗、法律と占星術の報告」である。前者は1878年、ライプチヒからE・C・ザハウが編集したドイツ語訳が⁽¹⁰⁾、翌年それを英訳したものがロンドンから出版された。前者は11世紀初めに書かれたマニ教に関する的確な記事を載せている。マニがインドの佛陀、イランのゾロアスター、西のイエス、最後にバビロニアのマニに到来した啓示の意義について述べているところは、マニの直筆書シャープーラガンに拠っていると推定される。そしてマニが自分がメシヤによって預言されたパラクレートである旨を明言したと述べている。マニの戒律、教訓、マニの誕生地、マニの書、その死に触れ、更にマニ教徒の習俗、教義を自らの体験に基いて、つとめてありのままに書こうとしている。後者の本でも同じくザハウが1887年にロンドンから校訂、編集して出版した。この新版が1925年、ライプチヒから出された。この著作には早くから散逸したマニに関する記事が採録されている。マニがインドでヒンズー教から輪廻転生の教義並びに潮の満ち干きの観念とを学んでそれを自己の教説の中に摂り入れたこと等を報告している。

比較宗教史の立場からオリエント宗教に関する資料に精通したコンラッド・ケスラーの「マニ・マニ教の研究」(第1巻、予備調査と史料、ベルリン、1889年)⁽¹¹⁾は、神学的関心と言語学とを結びつけた研究方法を駆使した秀れた研究であるが、2巻目が何故か刊行されなかったのは残念というほかはない。

II 敦煌文書の発見

20世紀の初め、多数の漢籍史料が敦煌付近のシナ・トルキスタン(今日の新彊省ウィグル自治区)で発見された。1900年5月26日、1人の道教僧(王円籙道士)が尠大な漢籍文書(仏画、仏典、古文書類)を莫高窟の1室(17洞)から発見した。1907年、英国のA・スタインが西域学術探検の途次、敦煌に立ち寄り、およそ5000点を越える中国古写本を買い取ってロンドンへ送った。その後1914年に再び訪ね、更に経文など多数を入手した。これらは現在大英博物館に所蔵されている。この文書群のなかには、中唐以降トルキスタンの当地区でマニ教徒が中国文化の余光をうけて製作した文書としてのマニ教写経文書がある。「下部讃1巻」(MSスタイン番号2140)、「摩尼光仏教法儀略1巻」(MSスタイン番号2141A、ただし前半部分)がそれである。

ついでフランスの学者、P・ペリオも1908年、敦煌の同発見場所を訪れ、かなり高価な資料(古写本)をパリ国立図書館へ移送した。この写本群のなかにも中国マニ教の研究にとって重要な原史料があった。さきに記したスタイン将来の「儀略1巻」の前半首部に続く後半部分がそれであって、この両者が合わさって1巻本となるものであった。

これらのマニ教写本の他に、中国北京の当時の京師図書館(現在の国立北京図書館)にあった敦煌出土の断簡史料がある。羅振玉が1911年、「波斯教殘経」として世に公表したものである。その経記によると、当時この古写本は、景教か摩尼教か、祇教か判然としなかったのでペルシアから流入したものとみて、仮に波斯教と名づけたという。しかし今日では、これが明らかにマニ教漢訳經典の1つであることを疑う者はいない。

これら漢訳經典については、E・シャヴァンヌとペリオと共同で「シナで発見されたマニ教徒の著作」(ジャーナル・アジアティック、10の18)⁽¹⁴⁾で、周到な研究を行なった。その後これらとは別に、敦煌出土史料についてE・ワールドシュミットとW・レンツらが研究し、「マニ教におけるイエスの位置」(プロシア科学アカデミー会報、4、1926年)⁽¹⁵⁾と「敦煌から出土したシナ・マニ教讃歌」(大英王立アジア協会ジャーナル、1926年)を、更に数年後、1933年には「シナ・イラン史料から見たマニ教教義」(プロシア科学アカデミー会報、13、1933年)⁽¹⁶⁾を、それぞれ発表して言語学上、貴重な業績を残した。しかしその教義上の結論には批判さるべき点が多い。

さきに述べた波斯教残経について、わが国では羽田亨が「新出波斯教残経に就て」（説林、第2巻）で、この残経が景教のものとも祆教のものともつかず混同されていたのを、判然とマニ教経典なりと断定された。儀略については、矢吹慶輝の他に、石田幹之助も「敦煌発見『摩尼光仏教法儀略』に見えたる二三の言語に就いて」（東亜文化史叢考所収）で精緻な考察を加えられた。

「下部讀1巻」といわれるスタイン蒐集写本に関しては、矢吹慶輝が学位主論文「三階教の研究」に副えられた参考論文として提出した稿本「摩尼教之研究」において、これを1915年大英博物館所蔵の敦煌出土本を調査した時、そのなかに偶然発見したマニ教断簡をマニ教礼讃文の1種であることを突き止め、マニ教の1原典としての特色ある稀覯本であることを指摘された。そしてその1部である「讃夷数文」の注解、「難無常文」の注釈を施して、マニ教における仏教語の転用を明らかにしたことは、わが国のマニ教研究の水準を世界に示したものとして特筆すべきものであった。この稿本は主論文と共に大正12年（1923年）9月1日、関東大震災で烏有に帰したが、これはのち矢吹が再び稿を起し隈溪叢書の1つとして第2次大戦時下刊行される予定であったが、未刊のまま終っていた。私にとって少年の頃から著者の岩波講座東洋思潮13「摩尼教」（1935年）を手に触れて以来、この未刊の幻の名著を趁い求め今日に及んだが、1988年7月、「マニ教と東洋の諸宗教」（佼成出版社）として門下生、知人を中心とする方々の努力で遂に覆刻されたことは無上の慶びに堪えない。

III トゥルファン文書発見以後

20世紀に入ると、敦煌文書の発見と相前後して、トルキスタンを中心とした中央アジア方面の4次に互るドイツ学術探検隊による発掘の結果、大量のマニ教本来の文書、断簡、写本等が續々と発見され、ヨーロッパに齎らされた。このうちで最も価値ある史料は、シナ・トルキスタンの砂中に埋もれたマニ教僧院の廢墟（大部分が旧高昌、現在のトゥルファン近傍の遺跡）から出土した中世ペルシア語とパルティア語、ソグド語の史料からなるマニ教文書群である。前2者は中央アジアのソグド人のための教会語であって西方イラン語群に、後者は東方イラン語群にそれぞれ属する。この他トルコ・ウィグル語文書もあった。この発見、将来された史料群の大部分はベルリンに保存されたが、その解読、研究によってマニ教の研究は一段と発展を遂げ、有能なドイツの学者F・W・ミュラーの論文の数々は、それらの研究の先端を往くこととなった。因みにこれらマニ教断簡史料等に、M記号のもとに整理番号がつけられたのも、このミュラーからであった。Mはマニ教文書類を意味するManichaeicaの頭文字をとった。

続いてさきのドイツ探検隊の第2次、第4次のリーダーをつとめたA・フォン・ル・コックは、トゥルファンで発見した一連のトルコ・ウィグル語断簡史料を編集整理して発表し、またその著「仏教の古代末期」（2巻、ベルリン、1923年）⁽¹⁹⁾のなかで、幾つかのマニ教細密画について発表した。ロシアではC・ザレマンがマニ教断片史料を、W・ラドロフがマニ教徒の「懺悔祈禱書」を、それぞれ研究し、実りある成果をあげた。

また名著「ミトラ教」を著わしたF・キューモンは、「マニ教の研究——テオドル・バルコーナイによるマニ教的宇宙観——」（1巻、ブリュッセル、1908年）⁽²⁰⁾を書いて、マニ教研究に新味を加えた。

このように20世紀に入ってからは、マニ教の内容は19世紀までの研究によるそれと比べて極めて明瞭なものとなり、本来のマニ教文書の言語学上の解明が進むにつれて、グノーシス主義において占めるマニ教の位置が次第に明らかになってきた。W・ブセットは問題作「グノーシスの主

要問題」(ゲッティンゲン, 1907年)⁽²³⁾で、R・ライツェンスタインは、その最も重要な著作「イランの救済神話」(ボン, 1921年)⁽²⁴⁾で、グノーシス思想とマニ教との関係を追及して、両者ともマニ教をグノーシス主義のイラン的形態の典型とみる点で一致する見解に達した。H・ヨナスは、「グノーシスと古代末期の精神」(第1部, ゲッティンゲン, 1954年, 3版, 1964年)⁽²⁵⁾所収の「神話学上のグノーシス」篇で、グノーシスのイラン的タイプとしてマニ教の救済ドラマを位置づけた。これら3学者と異ってF・バーキットは、マニ教がキリスト教グノーシスの1派であったことを「マニ教徒達の宗教」(ケンブリッジ, 1925年)⁽²⁶⁾で証明しようとした。

さて1930年、エジプトで多量のコプト語による写本文書群が発見された。純然たるキリスト教的作品は少く、多くはギリシア語から訳されたグノーシス的諸派の文書で、内容的には神秘的、黙示文学的、ユダヤ・キリスト教的、グノーシス的外典が多い。旧約・新約の翻訳もあり、偽典も多い。それらに混ってコプト語マニ教文書も発見された。これらについてはC・シュミットの手で報告された。これは敦煌、トゥルファンでの発見に比すとも劣らない重大な発見で、その詳細が1933年、C・シュミットとH・J・ポロツキー共著の「エジプトで発見されたマニ文書」(王立プロシア科学アカデミー会報I, ベルリン, 1933年)⁽²⁷⁾によって報告された。この史料群は3世紀末から4世紀にかけてエジプトへ伝道に來たマニ教僧がシリア語原本をギリシア語に訳したものである。エジプトの改宗者はギリシア語を余りよく読めなかったらしく、ギリシア語から更にコプト語(主としてサブアクミシユ方言)に訳したものであった。しかしそれはシリア語原本にかなり近いものだったと推定できる。以下それら史料集を紹介しておきたい。

(1) H・J・ポロツキー校訂「マニ教説教集」(スツットガルト, 1934年)⁽²⁸⁾。(2) C・R・C・アルベリー編・校訂「マニ教の詩篇」(スツットガルト, 1938年)⁽²⁹⁾。(3) H・J・ポロツキーとA・ペーリヒ校訂, H・イブシエル協力「ケファライヤ(教えの精髓)」(スツットガルト, 1940年)⁽³⁰⁾。これら各史料集のお陰で初期マニ教の実像へ更に肉迫して考察できるようになったのである。

IV ヘニングの貢献

ここで、現在のマニ教学の進展に大きい学恩を広く与えたイギリスの碩学、W・B・ヘニング(1967年没)について語らなければならない。現在活躍するマニ教研究者で、彼の影響をうけない者はないといってよいであろう。30年に亘って彼は周到卓抜な注釈を加えて、多くのマニ教史料を公けにした。そのお陰で幾多の未知の断片史料を知ることができるようになった。彼はW・レンツとともにF・C・アンドレアスの弟子であったが、プロシア科学アカデミー会報に、恩師アンドレアスの学問的遺産であるシナ・トルキスタン出土史料を「中世イラン語のマニ教文書(マニケイカ)」(I—III, プロシア科学アカデミー会報, 1932—34年)⁽³¹⁾として編集した。このなかで従来のM記号システムの他に、特別な方法で記号による分類と番号のシステム化に貢献した。例えば、T II Dとあるのはトゥルファン第2次学術探検によるD地区からの出土を意味するということ。またヘニングの弟子M・ボイスは「ドイツ・トゥルファン・コレクションにおけるマニ教原本のイラン語写本の目録」(ベルリン, 1960年)⁽³²⁾で、史料を見易くするために各系統別の整理番号ごとに簡単な史料説明を施して、研究者に至便な手引を与えて貢献した。

ヘニングの論文で特筆すべきものの1つは、「巨人の書」(オリエント・アフリカ研究院紀要, 11の1, 1947年)⁽³³⁾で、各国語の断片からはほぼ原型に近い復元を行った。もう1つは、G・ハルーンとの共同執筆による「光明仏, マニの教義と教説の様式とに関する大綱」(アジア・メジャー, 3の3, 1952年)⁽³⁴⁾で、敦煌から発見された「摩尼光仏教法儀略1巻」のうち、スタインによって将

来された経文の前の部分（約3分の2に当る）について考察し、殊にマニ教正典類の漢訳名の音義、語義を詳しく論証した。あわせてマニの誕生と死の年代、マニ教正典名の異同についても言及した。なお、同経文の残りの後半部分（約3分の1に当る）はいわゆるペリオ断簡とよばれているもので、P・ペリオによってフランスに齎され、シャバンヌとペリオとの共著で1913年に、「シナで発見されたマニ教徒の著作」（ジャーナル・アジアティック、10の18〈前述〉）で紹介されていたが、矢吹慶輝や石田幹之助が既に発表していた見解の通り、このヘニングとハルーンの論文で、ペリオ断簡がスタイン将来の写本と同一経文を構成するものであったことを確認した。

マニの生涯の年代算定について独自の見識を示したのは、S・H・タキザデーフの「タクミラー」（ヘニング英訳『マニの生涯の日時』アジア・メジャー、ニューシリーズ、4、1957年）³⁵⁾で、彼はヘニングのマニの生涯の年代算定に対し、つねに対蹠的な算定結果を示した。マニの死をヘニングは274年3月2日としたのに対し、タキザデーフは277年2月26日とし、またシャープール1世の即位、死、オフルミズド王、バフラム1世の死の年代算定等でも、対蹠的な結果を示したこと等はその好例である。

ヘニングはまたソグド語で書かれた「マニ教の祈禱懺悔書」（プロシア科学アカデミー研究報告、1936年）³⁶⁾の紹介をしている。この書はマニ教々団内における聴従者（平信徒）が出離者（出家修道僧）に懺悔、告白をした文を載せており、マニ教をシルクロードを東へと伝播させた功労者ソグド人の信仰を知る上で貴重な史料となっている。なお、この祈禱懺悔書は正しくはフワストゥワーニフトとよび、J・P・アスミュッセンが「フワストゥワーニフト、マニ教の研究」（アクタ・テオロギカ・デニカ、第7巻、1965年）³⁷⁾でも詳しく研究している。

ゾロアスター教の研究者として有名なA・V・W・ジャクソンも、マニ教に関する論考を精力的に発表した。そのなかで「マニ教の研究」（ニューヨーク、1932年）³⁸⁾では、その厳正な原典主義の立場からマニを二神論的宗教のゾロアスター教の改革者³⁹⁾と見做す見解を示した。その他、内容についてまで詳しく触れるのは避けるが、O・G・ウェゼンドク、A・ペーリッヒ、H・S・ニーベリらの業績には注目すべきものが尠くない。ヘニングとA・ギランとによってなされた中世ペルシア語、パルティア語の動詞研究や、I・ゲルシェビッチの「マニ教ソグド語の文法」（オックスフォード、1954年）⁴⁰⁾は、トゥルファン出土史料の解読研究に役立った。

V ピュエクの業績

ヘニングと並んで、次の2人の学者を忘れることはできない。フランスのH・C・ピュエクとスウェーデンのG・ウィデングレンである。

ピュエクは1949年、「マニ教、その開祖一彼の教義」（ミュゼー・ギメー、ビブリオテク・ド・ディフュージョン、56、パリ）⁴¹⁾を著した。本書はアクタ・アルケライを中心にマニ教の原史料に関する厳密精緻な調査から書き始める。ついでマニの生涯と死に関する年代の考証に注意を向ける。彼の際立った叙述の特色は、原史料への忠実な準拠と正確な解釈に基づいている点にある。彼はマニ教のもつ著しい特徴として3つあげる。(1)マニ教は世界的普遍的宗教の性格をもっていたこと。マニの意図に拠って、マニの教えこそ全世界に救済を齎すことができる唯一の宗教であり、マニに賜った啓示こそ真実のもので、彼以外の啓示はすべて不完全なものであったという点をあげた。(2)マニ教は旺盛無比な伝道布教精神に支えられていたこと。それがマニ教をして急速に広く伝播させた理由であったこと。(3)マニの自筆になる正典がマニ教の信仰の精髓を形成したこと。教団分裂の危機からマニ教徒達を守るため、マニは光の神（光の父）からの啓示（神からのメッセージ）を書き留めて書物としたこと。

このようにマニ教の本質を明らかにしながら、ピュエクはマニ教をシンクレティズムとよぶよりも、グノーシス主義（二元論的思考を基本とする）とよぶ方が好ましいと述べている。彼はその他に本書以前にも以後にも注目すべき論考を数多発表して後進の学徒を裨益した。⁽⁴⁵⁾

VI ウィデングレンの寄与

ウィデングレンは、マニ教をインド・イランの宗教、マンダ教、シリア・グノーシスの宗教などとの関連のなかに位置づけた優れた論文を2つ書いた。

まず「大ヴォフ・マナフと神の使徒、——イランの宗教とマニ教の研究——」（ウプサラ大学紀要、1945年、5）では、題名通りマニ教文書にでてくるマンヴァーフメッド・ヴァズルグについてとりあげている。序論でウィデングレンは、古代イランの思想から発展したこの偉大なマンヴァーフメッドのなかに、マニ教的グノーシス観念の可能性があることを明らかにしようとする。そしてこの観念が、究極において個人の魂に同一化する宇宙霊や神と人間との間を仲保する使徒と、どんな関係があるのか追及しようとした意図を述べる。ついで第1章では、マニが天界の守護霊たる同伴者ニ連れ（ナヴァテア語のタウム、コプト語のサイシュ、中世ペルシア語のナルジャミーグ）によって啓示をうけたことをとりあげ、この場合、同伴者は死者の魂を天界の光の故郷に運ぶ乗物であると推定している。またこのマンヴァーフメッド（ニヴァフマン）はギリシア的観念の大いなるヌースに相当し、同時に神の使徒とも一致することを論証した。更にこのヴァフマンは現実に化身し、具体的には教団（宗教共同体）の最高司牧者として現われるとした。第2章では、アヴェスタにおけるヴォフ・マナフ（善思）なる語の意味を吟味する。大宇宙の力、ヴォフ・マナフと個人のマナフとの関係を検討し、ついでマニ教の中世ペルシア語（パフラヴィ語）文書と、ゾロアスター教の中世ペルシア語文書とのなかにでてくる人間に内在するヴォフ・マナフという語の意味にはそれぞれ密接な相似が見られることに注意を払う。その相似観念やその他の諸概念の検討を通して、マニ教思想の背景に古代インド・イラン的宗教観念の存在を想定せざるを得ない程の類縁関係が見出されると述べる。第3章では、マニ教を含めてグノーシス主義との類似が、インド・イラン的思考のなかにあることを幾つかの例証をあげて指摘する。しかし本論文を通読した限りでは、彼の詳細な検討と意図とも拘らず、マニ教とインド・イラン的観念との間にそれほど深い対応性、一致性があったと十分納得させるのに成功したようには思えない。

つぎに「マニ教におけるメソポタミア的要素」（ウプサラ大学紀要、1946年、3）⁽⁴⁶⁾をみておこう。著者はまずマニ教の原初形態のなかに、どの程度メソポタミアの宗教的要素、シリア・キリスト教的要素が存在するかを問題にする。そして原典史料を博引旁搜しつつ、生命の子の観念をはじめ、生命の木、生命の門、生命の家などの諸観念がマニ教思想のなかにあることを突き止め、これらがシリア、メソポタミアの古い神話のなかでみられる再生信仰のイメージであろうと推定する。またマニ教神話上で北方位の光明の王国に対立する暗黒の王国の所在を南方位に擬して描かれていることや悪竜の相貌の描写などは、明らかにメソポタミア起源のものであろうとしている。またマニ教、マンダ教両文書にみられる原人、アダムアダムの救済神話もタンムズ再生神話を想起したものに相違ないとみる。生命の木の件りで、救済宗教としての「マニ教、マンダ教、シリア・グノーシス宗教」の3者には共通した神話的祭儀的複合観念があって、それは古いメソポタミアの神話的、祭儀的パターンへと遡源するものであろう」と彼はいう。その他、医師、光、灯、使者、使徒などの諸問題に跨って考察を加え、改めてマニ教には沢山のメソポタミア的要素があるとして、マニをメソポタミア神話にイラン的解釈（理解）を与えた人物であったと論じた。そして「偉

大な人間」というものが救済者という際立ったイメージでこの地方で崇拝されはじめた時が、これらメソポタミア的イラン的救済済宗教が融合し複合化を遂げた最終段階で、この段階はマニが出現する以前、長い数世紀に亘って既に進行しつつあったものと推定しなくてはならないというのである。終りに、彼はマニの史的意義をつぎのように記している。マニ出現の政治的宗教的意義はササン朝ペルシア初期の支配者が採用した宗教政策の背景を探ればかなり判然とする。マニは以上述べたような複合的重層的（シンクレティズム的）宗教としてのマニ教をもって、イランとメソポタミア両地域の人々に広く受け容れられるような宗教の出現を期待したササン朝の国王に献上することができた。更にマニの宗教体系の基本思想はイラン的であるが、言語表現はユダヤ教、ユダヤ・キリスト教に親近感をもつメソポタミア的グノーシスのそれであるとしつつも、このような方向が、マニの本来の意図とどう関係するのかという問題を今後に残して文を結ぶのである。

彼は1960年に「パルティア時代におけるイラン・セムの文化邂逅」（ケルン・オブラーデン）⁽⁴⁸⁾で、前記論文の主題を更に時代を遡らせて発展させた。

続いて彼はマニとその宗教に関して、ポピュラーな形で注目すべき論著を発表した。「マニとマニ教」（スツットガルト、1961年、ウルバン文庫、57）⁽⁴⁹⁾がそれで、マニの時代の政治的、文化的、宗教的状况を描き、マニの生涯、その教義、史料と文献、教会組織、マニ教芸術、マニ教の伝播へと筆を進める。マニ教形成にはマンダ教、ミトラ信仰、ズルヴァン教の寄与した点を重視し、殊にマニ教の中世ペルシア語系の伝承のなかには、二元論のなかにあって一神論的傾向の強いズルヴァン教体系的が重要な意義を担っている点を注目した。そして最後の章で、マニを1人の論理的思考による宗教哲学者としてではなく、むしろ二神論的折衷主義的神智学者として捉え、神的啓示を通して神意を知らせた点にマニの人性の特質をみている。

ウィデングレンは1965年には、自編による「イランの宗教」（スツットガルト、人間の宗教、14）⁽⁵⁰⁾のなかで、イランのマニ教について簡潔な解説を与えた。そこで改めてマニ教の3時観（2宗3際観）に触れ、古インド、イランのそれに由来するものとし、その黙示録的終末論は少なからずイラン的な、そしてズルヴァン教のなかにある終末観のそれと深い関係があるとみている。

ウィデングレン以外で、現在も活躍しているマニ教学者には、デンマークのJ・P・アスミュッセン、オランダのL・J・R・オルトラががいるが、なかでもチェコスロヴァキアのオタカル・クリーマの「マニの時代と生涯」（チェコスロヴァキア科学アカデミー・オリエント研究所論文集、18巻、プラハ、1962年）⁽⁵¹⁾も出色の労作である。彼はこの著作で、開祖たるマニの時代と、特にマニ出現以前のオリエントの経済、社会、言語、文化、政治をめぐる時代背景の解明に重点をおいて考察を進めた。マニ教はマニと同時代人の大衆の不安の声から生まれたもので、マニ教のなかに民衆の解放と救いへの憧憬が反映していると見、民衆たる信徒達にとってマニは使徒であると同時に、預言者、フォーステール、光の御使い、聖なる父、教師、救済者、光の招来者として崇敬の対象となったとする。東欧圏に属するマニ教研究の1傾向を示すものとして注目される。

VII 新史料ケルン・マニ・コードックスの解説、公表以後

以上1960年代までのマニ教研究の歩みを通観する限り、マニ教はその起源において主としてイラン神秘宗教に発するとする理論のほか、殊にR・ライツェンスタインの学派によって提起され、支持されてきた見解が有力となってきた観がある。この見方は重要なマニ教史料の大部分が、トゥルフアン、敦煌出土のイラン語系・漢語系の史料とその解説とに大きく依存したことによる自然の成りゆきであったと思う。だが前に少し触れたが、第2次大戦の僅か前にエジプト出土のマ

ニ教コプト語史料の発見、解読から、今まで支配的である上述のマニ教観を修正する動きが促進されたのであったが、この史料だけではマニ教の起源に関する見方を根本的に修正するまでに至らなかった。ところがエジプトのオクシュリンコスの洞穴から、以前に発見されていたものでケルン大学のパピルス文書コレクションのなかに収蔵されていた小型判の羊皮紙の古写本（コードックス＝番号 Oxy. 2065）がその紙塊の処理による復元から解読可能となった。いわゆるケルン・マニ・コードックスとよばれるものである。これは 5 世紀頃、シリア語（アラム語）の原本からギリシア語に訳されたものと思われる。タイトルにギリシア語で、ペリ・テス・ゲネス・トウ・ソマアトス・アウトウ（彼の身体の起源について）とあるように、マニの生涯の前半生（少年・青年期）までを中心に記述されており、その解読が A・ヘンリックス博士と L・コーネン教授によって進められ、その研究と史料の 1 部が 1970 年に発表されて、それまでのマニ教観修正への動きは決定的となってきた。この論文は「ギリシア語のマニ・コードックス」（パピルス学と碑銘学年報、5、ボン、1970 年）⁶⁰で、これによると従前から問題とされてきた「ムグタシラー」という名称で「フィリスト」に記載されている宗派（教団）が、実は南バビロニア地方のユダヤ・キリスト教を主要素とする 1 派、しかしこの派はその信仰と習俗とがユダヤ教に起源すると説明できる雑種の洗礼教団たるアルカサイ派であって、マニは 4 歳の幼児期からこの教団で育成され、のち 24、25 歳の頃、その教団の改革者となって離脱し、やがて新宗教たるマニ教を創唱するまでの驚くべき新事実が明らかになってきた。このなかに記述されたマニの伝記的部分については、既に以前に発見され、研究されたコプト語史料、中世ペルシア語、パルティア語、ウィグル語、アラブ語等の諸史料（前述）によって、ある程度⁶⁰知られてはいたが、特にマニの前半生についての研究にとって、新たな根本史料となってきた。またこの記述内容と平行する時期の当時の社会的、文化的背景についても、貴重な情報を提供していることが分かってきた。更にマニの所属したエルカサイ派とは何かということも改めて問題になり、マニとエルカサイ派との関係とともにエルカサイ派自体の研究も現われてくるようになった。その結果、2 世紀前後における両者を含めて、グノーシス的洗礼主義運動の背景にはユダヤ黙示文字を中心とする異端的ユダヤ教があったことも大きくクローズアップされてきた。とにかくマニ教研究が、この新史料の出現を契機に新しい研究段階に入ったことは注目すべきことである。

結 び に

以上 1970 年までのマニ教学研究の歩みを荒削りながら跡づけてきた。しかし表題に掲げたマニ教学 250 年の歴史とするには、1980 年代後半のそれまでを書き綴らなくてはならないのであるが、既に予定の紙幅も尽きたので、本稿ではやむを得ず 1970 年までを取り扱うことにした。

今後に残された仕事の 1 つは、1970 年以降、1980 年代後半の現在に到るまでのマニ教学における目覚ましい成果をとりあげ、それを検討し紹介することである。あと 1 つは中国や日本をはじめ、欧米以外の諸国におけるマニ教学の歩みを系統的に回顧し、その学問的状況を明らかにすることである。これらの仕事は、筆者の力量をもってしては至難のわざと考えられるが、それをつぎの機会に期することにして、ひと先ず本稿の筆を擱くこととしたい。

(注)

- (1) マニ教側の残した史料には、敦煌、トゥルフアン出土のマニ教経文類にみられる讃歌、詩篇等。エジプト出土のものにコプト語讃歌、詩篇と説教集等がある。
- (2) 4世紀頃のシリアのエフライム、ギリシアのアレキサンデル・リコポリヌス、4～5世紀のヒッポのアウグスティヌスらによるマニ教論駁書等はその代表である。
- (3) I. de Beausobre, Hestoire de Maniché et du Manichéisme, 2 Vols. Amsterdam, 1734 and 1739
- (4) Hegemonius, Acta Archelai, herausgegeben von C. H. Beeson. Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte, Vol. 16, Leipzig, 1906
- (5) S. Runciman, Le Manichéisme Médiéval, L'hérésie dualiste dans le christianisme, Paris 1949
- (6) F. C. Baur, Das manichäische Religionssystem nach den Quellen neu untersucht und entwickelt, Tübingen 1831;reprinted Göttingen 1928
- (7) R. Harnack, Lehrbuch der Dogmengeschichte, Bd 1. 1886—1910
- (8) G. L. Flügel, Mani, seine Lehre und seine Schriften, Leipzig 1862
- (9) B. Dodge, The Fihrist of al-Nadīm, 2 Vols. Columbia university, N. Y. and London 1970
- (10) E. C. Sachau, Chronologie orientalischer Völker von Albērūnī, herausgegeben von Dr. E. C. Sachau, Leipzig 1878
- (11) E. C. Sachau, The Chronology of Ancient Nations. An English Version of the Arabic Text of the Athār-ul-bākiya of Albīrūnī, A. D. 1000, Translated and edited with notes and index by Dr. E. C. Sachau, London 1879
- (12) E. C. Sachau, Al-Bīrūnī's India. An Account of the Religion, Philosophy, Literature. Geography, Chronology, Astronomy, Customs, Laws and Astrology of India, about A. D. 1030, ed. in the Arabic original by E. Sachau, London 1887, New Edition Leipzig 1925
- (13) K. Kessler, Mani, Forschungen über die manichäische Religion, Bd. 1, Berlin 1889
- (14) É. Chavannes-P. Pelliot, Un traité manichéen retrouvé en Chine, J. A., 10e sér. X VIII, pp. 499~617
- (15) E. Waldschmidt-W. Lenz, Die Stllung Jesu im Manichäismus. APAW 1926, Phil. -hist. Klasse, No. 4, Berlin 1926
- (16) E. Waldschmidt-W. Lenz, A Chinese Manichaeen Hymnal from Tun-Huang, JRAS 1926, pp. 116~122
 " - " ;Additions and corrections, JRAS 1926, pp. 298~299
- (17) " - " Manichäische Dogmatik aus chinesischen und iranischen Texten. SPAW, 1933, No. 13, pp. 480~607
- (18) F. W. K. Müller, Handschriften-Reste in Estrangelo-Schrift aus Turfan, Chinesisch Turkistan, I. - II. SPAW, Berlin 1904
- (19) A. von Le Coq, Die manichäischen Miniaturen, Die Buddhistische Spätanteke, Vol. II, Berlin 1923
- (20) C. Salemann, Ein Bruchstück manichäischen Schrifttums im Asiatischen Museum, Mémoires de l'Académie Impériale des Sciences de St. -Petersbourg, Série 8, Part VI, No. 6, 1904, pp. 1~26
- (21) W. Radloff, Chuastuanit, Das Bussgebet der Manichäer, St. -Petersburg 1909
 " , Nachträge zum Chuastuanit, dem Bussgebet der Manichäer (Hörer), Bull. de l'Académie Imperiale des Sciences de St. -Petersbourg 1911, pp. 867~896

- (22) F. Cumont-M. A. Kugener, *Recherches sur le manichéisme, I: La cosmogonie manichéenne d'après Théodore Bar Khoni*, Bruxelles, 1908
- (23) W. Bousset, *Hauptprobleme der Gnosis, Forschungen zur Rel. und Lit. d. Alten und Neuen Test.*, 10. Heft, Göttingen 1907
- (24) R. Reitzenstein, *Das iranische Erlösungsmysterium*, Bonn 1921
- (25) H. Jonas, *Gnosis und Spätantiker Geist, I - II Teil*, Göttingen 1954—1964
- (26) F. C. Burkitt, *The religion of the Manichees, Donnellan Lectures for 1924*, Cambridge 1925
- (27) C. Schmidt-H. J. Polotsky - H. Ibscher, *Ein Mani-Fund in Ägypten, Originalschriften des Mani und seiner Schüler, SPAW, I, 1933*, pp. 4 ~ 90
- (28) H. J. Polotsky, *Manichäische Homilien, Band I*, Stuttgart 1934
- (29) C. R. C. Allberry, *A Manichaean Psalm-Book, Manichaean manuscripts in the Chester Beatty Collection. Part II*, Stuttgart 1938
- (30) H. J. Polotsky - A. Böhrig, *Kephalaia, Band I. 1 Hälfte, Lieferung 1 - 10*, Stuttgart 1940
- (31) W. B. Henning, *Mitteliranische Manichaica aus Chinesisch-Turkestan Von F. C. Andreas, Aus dem Nachlass herausgegeben von Dr. W. Henning, I — III SPAW. 1933—1934*
- (32) M. Boyce, *A Catalogue of the Iranian manuscripts in Manichaean script in the German Turfan collection, DAWB, Nr. 45*, Berlin 1960
- (33) W. B. Henning, *The Book of the Giants, BSOAS, XI, 1, 1943*, pp. 52 ~ 74
- (34) G. Haloun-W. B. Henning, *The Compendium of the doctrines and styles of the teaching of Mani, the Buddha of Light, Asia Major, a British Journal for Far Eastern Studies, New Series, Vol. III, Part 2, 1952*, pp. 184 ~ 212
- (35) S. H. Taqizadeh-W. B. Henning, *The dates of Mani's life, Asia Major, a British Journal for Far E. Studies, New Series, Vol. VI, Part 1, 1957*, pp. 106 ~ 121
- (36) W. B. Henning, *Ein manichaisches Bet- und Beichbuch, APAW, 1936, X*
- (37) J. P. Asmussen, *Xuāstvānīft, Studies in Manichaeism, Acta Theologica Danica, Vol. VII, Copenhagen 1965*
- (38) A. V. W. Jackson, *Studies in Manichaeism, JAOS, XLIII, 1923*, pp. 15 ~ 25
- (39) O. G. Wesendonk, *Die Lehre des Mani*, Leipzig 1922
- (40) A. Böhlig, *Christliche Wurzeln des Manichäismus, Bulletin de la Société d'Archéologie Copte XV, 1960*, pp. 41 ~ 61
- (41) H. S. Nyberg, *Die Religionen des alten Iran*, Leipzig 1938
- (42) W. B. Henning, *Das Verbum des Mittelpersischen des Turfanfragmente ZII, IX, 2, 1933*, pp. 158 ~ 253
 " _____, *A List of Middle-Persian and Parthian words, BSOS IX i 1937*, pp. 79 ~ 92
 A. Ghilain, *Essai sur la langue parthe, son système verbal d'après les textes manichéens du Turkestan oriental Bibliothèque du Muséon, Vol. 9, Louvain 1939*
- (43) I. Gershevitch, *A grammar of Manichean Sogdian, Publications of the Philological Society XVI, Oxford 1954*
- (44) H. ch. Puech, *Le Manichéisme, Son fondateur-sa doctrine. Musée Guimet, Bibliothèque de diffusion, Tome LVI, Paris 1949*
- (45) " _____, *Der Begriff der Erlösung im Manichäismus, Eranos Jahrbuch 1936, Zürich 1937*, pp. 183 ~ 286

- _____, Manichéisme, Histoire Générale des Religions, paris 1952, Tome III, pp. 85~116
- (46) G. Widengren, The Great Vohu Manah and the Apostle of God, Studies in Iranian and Manichaeism, Uppsala Universitets Årsskrift, 1945: 5. Uppsala-Leipzig 1945
- (47) _____, Mesopotamian elements in Manichaeism, Studies in Manichaeism, Mandaean and Syrian-Gnostic religion, Uppsala Universitets Årsskrift 1946: 3, Uppsala-Leipzig 1946
- (48) _____, Iranisch-semitische Kulturbegegnung in parthischer Zeit. Arbeitsgemeinschaft für Forschung des Landes Nordrhein-Westfalen, Geisteswissenschaften, Heft 70, Köln-Opladen 1960
- (49) _____, Mani und der Manichäismus, Urban-Bücher 57, Stuttgart 1961
- (50) _____, Die Religionen Irans, in Schröder: Die Religion der Menschheit, Bd. 14, Stuttgart 1965
- (51) J. D. Assmann, Manichäische Iesustexte aus kinesischem Turkestan DTT 21 1958, pp. 129~145
- (52) L. J. R. Ort, Mani, A Religio-Historical Description of his Personality, Leiden 1967
- (53) O. Klíma, Manis Zeit und Leben, Praha 1962, MOTAW, Bd 18
- (54) A. Henrichs-L. Koenen, Ein Griechischer Mani-Codex (P. Colon. Inv. Nr. 4780) ZPE 5 (1970) pp. 97~216
- (55) A. Henrichs と L. Koenen は1975年以後, ケルン・マニ・コーデックス (略称 CMC) の原文, 独訳, 注釈について, 1978年, 1981年と引き続き, 精力的な発表を, ZPE 紙上に行っている。詳細は後日に触れたい。